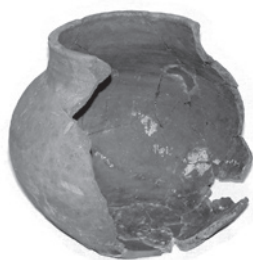


木田余出土の埋蔵銭



木田余出土の埋蔵銭



銭を入れた土器



銭を通したひも(繻)

この埋蔵銭は、市内木田余の深さ約1mの土中から偶然に発見されたものです。銭の大半は中国からの渡来銭(銅銭)で、藁のような植物質のひもに通した、繻と呼ばれる状態で大量にまとめて埋められていました。ひもが腐らずに繻で発見されることは珍しく貴重なもので、銭95〜97枚を1単位とし、10単位を1繻に連ねたような状態が見てとれます。1単位は銭1000枚(100文)、1繻は銭10000枚(1貫文)に相当すると考えられます。入っていた銭は全部で約11kg、枚数にして約3000〜3500枚と推定されます。

木田余の埋蔵銭は、地元で作られた素焼きの土器に入れられていました。全国的にも陶磁器や素焼きの壺や甕が、大量の銭を埋めるときに使われています。また、箱や桶などの木製の容器や、布の袋などを使用することもあったようです。

市内の手野、木田余、神立などから、地中にまとめて埋められた大量の銭が発見されています。このような例は全国各地でも報告されており、約300万枚を超える銭の出土が確認されています。銭を注意深く観察すると、表面に「永楽通寶」など銭の名称が書かれていることがわかります。これらの名称からこの銭がいつごろどこで作られたものかを知ることができ、その結果、発見された埋蔵銭の大部分が、

今から約1300年から500年くらい昔に中国で造られたもので、銭を埋蔵したのは中世と呼ばれる今から500年前ごろであることがわかりました。ちなみに、木田余の埋蔵銭は、判別できた銭の年代や土器の特徴から、15世紀末から16世紀初頭ごろの室町時代に埋められたものと考えられます。埋蔵銭には、朝鮮半島で作られた銭も少数含まれていましたが、それに比べ日本の銭はほとんど見つかっていません。

これらの銭は、中世の物価から見てもかなりの大金になります。埋蔵銭は、大量の銭を埋めることのできた富裕者の存在を想像させます。木田余、手野の銭の発見された場所の近くには、木田余城や手野城など中世の館跡が確認されています。これらの館は中世にこの地域を支配した小田氏に關係した遺跡と伝えられており、銭の埋蔵者もこれにつながる地元の領主層であった可能性も考えられます。地中深くに埋められた大量の銭からは、霞ヶ浦に臨むこの地域がさまざまな商品流通などにより経済的に発展し、豊かに成熟した社会状況を読み取ることができ、ます。

ご紹介した埋蔵銭は、博物館展示室3の平成19年度秋季展示でご覧いただけます。博物館では季節ごとに展示品を入れ替えながら、土浦地域の歴史と文化をご紹介します。

岡市立博物館 (☎824・2928)

